

論文内容の要旨

専攻名	経営意思決定 専攻	氏名	永田 吉朗
題名	財務分析の限界とネットワーク DEA による改善に関する一考察		
<p>論文内容の要旨</p> <p>1 本論文の目的</p> <p>財務状況に関する現状分析と財務目標値設定のために、財務分析が用いられる。しかし、伝統的財務分析の手法を用いても、資産や負債個々の保有高、売上高の達成水準、その他決定すべき項目が多すぎるために、個別の目標値を比率で示すことはできても、それらを統合した全体最適の目標値を金額で算出することはできない。また、伝統的財務分析では比較対象を選定することができない。この財務分析の限界を改善することができれば、戦略経営の中で、比較対象を選定し、財務目標を設定する際の有用な意思決定支援ツールとなる。</p> <p>本論文では、伝統的財務分析の限界を改善した、現代企業の戦略マネジメント・システムに貢献する新たな財務分析の手法を構築することを目的として、次のような考察を行った。</p> <p>まず、近年の企業価値重視傾向と金融機関による債務者格付けの変化の両面から、キャッシュ・フローの分析の必要性が高まっていることを示した。次に、現代企業の戦略マネジメント・システムの中心的な役割を果たすものとして注目されているバランスト・スコアカードにおける財務分析の役割の考察に重点を置きながら、現代企業の戦略マネジメント・システムでの戦略策定と財務目標設定について考察した。この考察によって、ROA およびキャッシュ・フローの詳細な分析を、全体統合的に行い、優良な比較対象を選定して、改善目標値を提示するという機能が、財務分析に求められていることを示した。</p> <p>しかし、伝統的財務分析の分析比率個々に基づいて得られる経営改善目標は、その分析比率を個別に改善するために有効であっても、分析対象事業体全体の改善に最適である保証はない。すなわち、伝統的財務分析には、個々の分析比率から得られる部分最適の改善案を、全体最適のために統合して改善目標を提示する機能がないのである。</p>			

氏名

永田 吉朗

2. 研究の成果

この伝統的財務分析の限界を改善するために、ネットワーク DEA 財務分析を構築した。財務分析理論を考慮しながら、ネットワーク DEA を用いて財務分析を行うための入力と出力の構造を新たに構築し、この入力と出力の構造に Slacks-based network DEA モデルを適用したものが、ネットワーク DEA 財務分析である。

ここで構築したネットワーク DEA 財務分析を、上場建設事業者の財務データに適用して、単年度の分析と、時系列比較分析を行った。分析の結果、ROA およびキャッシュ・フローの詳細な分析を、全体統合的に行い、優良な比較対象を選定して、入力ごとの効率性と改善目標を提示することができた。

さらに、いったん算定された比較対象企業を、比較対象から除外して、他の企業と自社との相対評価を試みる分析操作を用いることで、複数の分析値と改善目標値を得ることができ、戦略代替案の列挙と評価の際に有用な情報を提示することもできた。

また、算出した効率値について伝統的財務分析と比較し、順位付けの比較をおこなったところ、高い相関が確認され、ネットワーク DEA 財務分析と伝統的財務分析の整合性が統計的に検証された。さらに ROA とその展開式の重回帰分析を行い、ROA の展開式の財務比率からネットワーク DEA 財務分析の入力項目と出力項目を構築した手法が、不適切でないことを示した。

ここに、本論文の目的について一定の成果をみたと考える。

3. 今後の研究課題

財務項目のネットワーク状入出力構造に対する分析手法であるネットワーク DEA 財務分析を提示したのは、本論文が最初である。したがって、残された研究課題は未だ多い。

入力項目間や分析対象とする部門間の重み付けによって、現実の経営における重要性に即した分析結果を得る手法については、未解決である。また、「効率的」と分析された事業体には、経営改善目標が提示されない。時系列分析における時間の経過を考慮する分析方法の開発も必要である。これらは、モデルの改善により対処可能と考える。特に重要な問題点は、営業利益と営業キャッシュ・フローがマイナスのデータの分析ができないことである。モデルを改良することでマイナスの値に対処できれば、財務分析の対象が大きく広がることになり、管理会計における長年の課題を解決することになる。

入出力構造の妥当性や、採用するネットワーク DEA モデルについての研究が、今後さらに必要である。建設業以外の業種の企業の財務についても実証分析を重ねることで、本論文で構築したネットワーク DEA 財務分析モデルが改良され、現代企業の戦略マネジメント・システムに貢献するものになるよう研究を進めていきたい。